

も物質的にも、準備した。しかし、改革は経営耕地の配分における不均等状態を旧来のままに放置したため、改革による利益は経営階層により著しく違い、とくに上層においては「農業余剰」が恒常的に成立し、このことは創設された「自作農」を経過的なものにしている。すなわち、農民層の近代的分解がさけられなくなり、したがって古い家族制度も解体せざるをえないのである。

2. まず、農地改革が深い影響を及ぼした北日本の大地主地帯に着目し、その典型として庄内平野、および仙北平野における実体的変化を検討し、つぎに、旧来資本主義の影響のもとで高位生産力を成立せしめてきた西日本の典型地帯として奈良平野、岡山平野（西大寺地帯、倉敷地帯、与除村）および佐賀平野を検討する。いうまでもなく前者は低位生産力を基礎として家父長別家族制度を濃厚に存続させてきた地帯であり、後者は古い家族制度はすでに大正末期以降弛緩してきたのである。

3. 家父長的家族形態は明治維新にさいし廃絶されず資本主義のもとで高率地代と低賃金との相互規定関係を結節せしめてきたが、農業生産力の増大は家父長的結束の必然性を稀薄にした。すなわち、兼業農家の増大、1農家当り世帯員数の減少、中層以上の富に対する家族員の分配要求——農業分家、他業分家、高等教育、家族労働報酬——。倒人的意識の向上、等々にみられる。

16. 農地改革後における農家生活と家族制度

日本女子大付属農家生活研究所 好本 照子

1. 農地改革は、明治維新がなすべくしてなしえなかった近代的社會変革、すなわち土地所有の変革——日本近代化の基礎過程——を主な内容としている意味において、日本歴史にとり画期的意味をもっている。

農地改革は、土地所有における不平等を極度に縮小することにより旧来の小作料を農民の所得に転化し、したがって農家の生活水準を著しく向上せしめたとともに、また農業生産力の発展にとり必要な諸条件を、主体的に